

終戦前後の高女部 (一)

— 県関係公文書に見る —

小 松 八 郎

神戸女学院百有余年の歴史を回顧する時、今次大戦のもたらした痕跡は特に忘れる事のできないものである。当時の大要は、『神戸女学院百年史 総説』に詳記するところであるが、この度、中高部事務室で保管されていた昭和二十年年度県庁、市役所関係書類綴を照合するに、百年史の欠を補い、さらに正鵠を期する意味もあらうかと思われ、併せて当時の高女部の実態を探る一助とすべく、ここに発表する次第である。以下、一連の関係文書を資料として掲げ、解説を加えたい。なお、資料解説は殆ど神戸女学院週報に據ったことを附記する。

資料 (一)

学校報国隊配置転換ニ関スル報告書 (昭和二十年四月一日現在)

西宮市岡田山

神戸女学院高等女学部長二宮源兵

現在出勤セル工場事業場名	所在地	学年	出勤当初ノ員数	現員数	進学入隊等ニヨリ今後動員ルベキ員数	現在出勤先ニ於ケル勤勞事情	学校側ニ於テノ融和状況	配置転換出勤希望ノ工場事業所名
東洋ゴム化工株式会社	出屋敷	四年卒業者	一〇〇	八五	七〇	無	否	遠距離 普通
塩野義製薬武川工場	杭瀬	同	二八	二三	一一	有	否	遠距離 普通
①近泉第八工場	尼崎	五年卒業者	五三	四五	一七	一部有	適	遠距離 普通
③秋津社第三工場	鹿塩	五年	五〇	四一	三三	一部有	一部否	稍々遠 普通
指月電気工場株式会社 岡田山工場	西宮市 岡田山	三年	一三〇		一二六	無	適	近距離輸送状況良 円満
同	同	四年	一三六		一三三	無	適	同 円満
備考								
秋津社	二九	三	一	二	一	一	一	三七
近泉第八工場	一四	二	一					一七
東洋ゴム化工株式会社	六五	二						七〇
塩野義製薬武川工場	九							九
出勤セル工場事業場名	進学入隊等ニヨリ今後動員ルベキ員数	軍属	保姆	看護婦	疎開スル員数	家庭ノ樞軸者タルベキ員数	計	

右の文書は、昭和二十年四月十三日付で高女部長二宮源兵氏より県内政部長宛に報告されたものである。
 (筆者註、①は住友金属プロペラ製作所工場②は川西航空機工場を指す)

資料(二)

学校校舎転用状況報告書(昭和二十年四月三十日現在)

一、学校名 神戸女学院高等女学部

二、所在地

三、学年別学級及生徒数

学年別	学級数	学級定員	現在生徒数	学 徒 動 員 出 動 先	学 校 工 場 他 出 動 数
一 学 年	三	一六〇	一六二	学校工場(神武緊志館) 同 右 近泉第八工場 ③神武七〇〇四工場 秋津第三工場 塩野義製薬	一一一 一三四
二 学 年	三	一二〇	一四九		
三 学 年	三	一二〇	一二四		
四 学 年	三	一二〇	一三六		
附設課程	二	一〇〇	六〇		
計	一四	六二〇	六三一		

四、校舎転用状況明細

鉄 筋 コ ン ク リ ー ト														構造物
計	其	読	更	実	地	特	裁	体	雨	武		普	講	名
	他	書	衣	習	下	別	縫	操	天	道		通	堂	称
		室	室	工	室	教	室	場	場	場		教		
		室		場		室						室		
					</									

(註) 一、名称、特別教室ハ裁縫室、家事室ヲ除キタルモノ、其他ハ校長室、職員室、宿直室、小使室トス
 (二、以下略)

右の文書は昭和二十年五月十九日付で同じく県内政部長宛に報告されたものである。

(筆者註、③は東洋ゴム化工株式会社工場を指す)

資料(三)

動員学徒出動時期人員及出動終了時期人員報告
 標記ノ件ニ関シ左記ノ通り御報告致候也

記

出 動 工 場	学 年	出 動 時 期 人 員	出 動 終 了 時 期 人 員
住友プロペラ製作所	五 年	五〇	七
川西航空機株式会社	五 年	五〇	一
東洋ゴム化工株式会社	四 年	一〇〇	六
塩野義製薬株式会社	四 年	三〇	一一
指月電機工業株式会社	三 年	一三三	三年 四年
			二二五

以 上

右は昭和二十年十月二十六日付で兵庫県動員学徒援護会長持永義夫氏宛に提出されたものである。

資料(四)

学徒隊、職場学徒隊結成報告の件

標記ノ件別紙ノ通り及御報告候也

別紙

学徒隊結成報告(昭和二十年六月二十二日結成報告)

神戸女学院高等女学部学徒隊長

同 高等女学部長

二宮 源兵

一、学校名 神戸女学院高等女学部

一、学徒隊名 神戸女学院高等女学部学徒隊

一、隊長以下幹部職氏名

隊長 高女部長 二宮 源兵

大隊長 教頭、教諭 山田力太郎

中隊長 教諭 湯川 静子

同 同 山根 とも

同 同 浅生孝之助

同 同 近沢 静

一、隊編成ノ大要

別紙備考ノ通り

一、結成期日 昭和二十年六月二十二日

以上

(別紙) 神戸女学院高等女学部学徒隊組織(昭和二十年六月二十二日結成)

学徒隊長 二宮源兵

大隊長 山田力太郎

第一中隊長 湯川静子

第一小隊長 湯川静子(兼)

第一班長 第二班長

第三班長

第四班長

第二小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第三小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第二中隊長

山根とも

第一小隊長

山根とも(兼)

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第二小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第三小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第三中隊長

浅生孝之助

第一小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第二小隊長

浅生孝之助(兼)

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第三小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第四中隊長

近沢 静

第一小隊長

近沢 静(兼)

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第二小隊長

曾木喜久

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第三小隊長

第一班長

第二班長

第三班長

第四班長

第四小隊長

(兼)

第一班長

第二班長

(別紙) 職場学徒隊結成報告 (昭和二十年六月二十五日結成)

職場学徒隊長

高等女学部長 二宮 源兵

一、挺身工場名 神武九三六五工場 (学校工場名「神武緊志館」)

二、職場学徒隊名 神武緊志館学徒隊

三、隊長以下幹部職氏名

隊長 高女部長 二宮 源兵

中隊長 教諭 浅生孝之助

同 同 近沢 静

四、隊編成ノ大要

学工場ニ挺身スル第三、四学年ヲ以テ組織ス

隊編成ハ別紙学徒隊ニ於ケル、第三中隊及ビ第四中隊ヲ以テナス。

五、結成期日

昭和二十年六月二十五日

以上

右の学徒隊、職場学徒隊結成報告の文書は、昭和二十年六月二十六日付で県内政部長宛に提出されている。

資料(五)

兵教第七一〇号

昭和二十年八月三日

内政部長

中等学校長殿

学徒義勇戦闘隊ニ関スル打合会ノ件

学徒隊ノ結成後其ノ運営ニ付テハ格段ノ御工夫御努力相成居ルコトト存候ガ之ガ義勇戦闘隊ヘノ転移ニ関シ左記要項ニ依リ打合会ヲ開催可致候條貴職必ズ最寄会場ニ御出席相成度

記

一、会場 日時 参集地域

神戸山手高等女学校 八月九日十時 神戸市並ニ以東

(以下略)

二、打合事項

イ、学徒隊ノ戦闘隊ヘノ転移ニ関スル件

ロ、学徒動員ノ件

ハ、林野荒蕪地開墾動員ノ件

ニ、食糧薪炭増産ノ件

ホ、自家製塩ノ件

ヘ、其ノ他

(以下略)

資料(六)

出動学徒思想調査書送達ノ件

今般神武秋津社第三工場ニ於テ御調査ニ相成候頭書ノ調査書別紙ノ通り及送達候也

尚番号第四番ハ当日欠席ニテ欠如致居候

右文書は昭和二十年五月二十八日付にて二宮高女部長より県教学官竹浪友治郎氏宛に出されたものである。

解説

学校報告隊、工場動員の経緯

昭和十八年に入ると、学徒戦時動員体制が追々に確立し、学生生徒は報国隊編成によって一年に約四カ月は生産・輸送の各方面に動員され、授業は次第におこなわれがなくなった。^①この年、専門部は四月九日に、高女部が同十七日に相次いで学校報国隊結成式を挙行している。^②また、同年十一月二十日には昭和十五、十六、十七年度高女部卒業者を以てする勤労挺身隊が結成され、十二月十一日(土)九時より挙行された県下高等女学校挺身隊壮行会に二宮部長引率の下に隊員約三十名が参加している。^③工場動員は、勤労協力令により、先ず専門部家政科第一学年が翌十九年一月十日より栄織維工業武庫川工場に一カ月間出動したのを最初に、続いて専門部の文学部第一、二学年、英語師範科、家事教育科、及び家政科の第二学年、音楽科本科第二学年が第二陣として出動した。^④高女部は三月九日より四月八日まで、初めて第四学年生が専門学生に代わり第三陣として同工場に出動している。^⑤三月二十三日には高女部十八年度

卒業生的女子勤労報国隊の結成式が挙行され、校内作業場指導員訓練作業の開始に参加している。^⑥（於、榮纖維工業大和田工場）

四月十日、遂に学院作業場が開設され、開所式が講堂で挙行された。^⑦同十七日からは高女部勤労報国隊が六カ月間の出動配置について。週報第九八五号の彙報欄には次の記述が残っている。

一、学院作業

去ル四月十一日開所セル学院作業場ニ於ケル動力ミシンノ据付、来ル十九日マデニ完了。二十日より連日百名ノ者作業ニ従事シ得ニ至ル^{（トナリ）}予定ナリ。夫レマデハ同窓生ニヨル挺身隊ノミ作業ニ当リ、其後ハ更ニ在校生交替ニテ之ニ参加スルコトトシ、其最初ニハ高等部家政科第二学年生ヲ従事セシムル予定ナリ。

一、高等女学部第五学年生ノ勤労出動五十名ハ協力令ニヨル勤労動員命令ヲ受ケ、川西航空〇〇工場^⑧ニ四月十八日ヨリ六ヶ月ノ予定ニテ出動ス。十四日、神戸遊園地ニ於テ挙行セラレタル右壮行会ニハ二宮部長以下、松村、多胡、山根、近沢、早川ノ諸先生、監督ノ為メ付添ハレタリ。

なお、二宮部長は同二十八日、勤労報国隊入所式のため同工場に出張している。^⑨

同年六月には、この高女部第五学年勤労報国隊に対し、その団隊行動及び生産能率に於て功績顕著なりとして、表彰状並に賞金を川西会社社長より授与されている。^⑩

続いて、六月十五日より高女部第五学年生五十名が尼崎の住友金属株式会社プロペラ製作所に出動、また、同第三学年生百三十六名が同月二十三日より指月電気工業株式会社に出動することになった。但し、後者は当分の間は学校内に於て準備の指導教育を受けた。^⑪

更に残された高女部第四学年生も同月二十八日より百三名が東洋ゴム化工株式会社武庫川工場へ、三十名が塩野義

製菓株式会社杭瀬工場に動員を受け出勤した。(資料一、二、三)

この頃、戦局は益々熾烈化し、七月十八日には遂にサイパン島の悲報が公表され、翌日の朝礼に於てはサイパン島に戦歿せる英霊を偲び、その冥福を祈り、正午には全国一斉の必勝奉誓の宮城遙拝及び黙禱を捧げ、高女部生徒は黙禱の後、広田神社に祈願参拝している。翌七月二十日に東条内閣総辞職が公表されたが、これに先立つ同月十二日より専門部高学年生は通年勤務に就き、各科第二学年生(但し音楽部本科三年)は同日より十五日まで半日、十七日より二班に分かれて隔日にて作業に従事することとなり、続いて八月一日より九月三日まで課業を停止し、各科二学年生(但し音楽部本科三年)以上は連日作業に従事し、第一学年生は校外に於ける勤務に出勤することが予定された。

この慌しさの中で専門部各科の第六十二回卒業式(第一次)が九月十五日、九時より講堂で挙行されたが、いま、週報第一〇〇一号(十九年九月十二日付)によって当時の高女部及び専門部生の工場出勤の実態を探るに次の記述がある。子細にわたるが転記してみよう。

「高等女学部出勤中ノモノハ七月末現在ニ同ジ、即チ左ノ如シ

○川西航空宝塚製作所○住友金属プロペラ製作所○塩野義商店杭瀬工場○東洋ゴム武川工場○指月電気(校内) 但シ指月ハ専門学校ニ於テ社交館ヲモ作業場ニ用ケルコトナリタル為メ八月ヨリ高女部教室ニ移転ス。何レモ監督及連絡ノ為教員交替ニテ出勤ス。残留勉学中ノ低学年生ハ八月中勉学ト共ニ農園ノ手入其ノ他校内ニ於ケル作業ニ従事ス。(資料一、二、三)

専門学校ハ七月中旬ヨリ開始セル第二海軍衣糧廠提供ノ作業ヲ校内ニ於テ引続キ従事ス。七月中ハ高学年通年動員トシテ学業ヲ停止シテ専ラ之ニ当リ、第二学年生(音楽部ハ三年)ハ隔日就業トセシガ八月中ハ全校ヲ挙ゲテ学業ヲ休止シ、八時ヨリ十六時三十分マデ連日作業ニ服シ九月六日ヲ以テ予定数ノ製作ヲ終レリ。但シ此ノ間八月二十

四日、九月四日ハ仕上ニ必要ナルゴム印ノ調製ナラザリシ為メ休業シタリ。七月中ハ教師ヲ四班ニ分チテ之ガ指揮監督ノ衝ニ、八月中ハ二班ニ分チテ就ク。右製品ハ九月十二日(火)納入シテ更ニ同日之ト交換ニテ新資材ノ提供ヲ受クル予定ナリ。繰上ゲ卒業級生徒ハ十二、十三ノ兩日該當資材ノ整理組合セヲ行ヒ、各科ノ第二学年以上ノ生徒ハ九月十六日ヨリ學業ヲ当分休止シテ専ラ之ガ製作ニ従事スル予定ナリ。八月二十三日生徒勤務令及同令施行規則公布、即日実施セラレタレバ今後ノ生徒勤務ハ時局ノ進展ト共ニ益々強化セラルベシ。此ノ点ニ就キ專門校ハ講師各先生ニハ八月廿九日、生徒父兄各位ニハ九月五日夫々諒解ヲ求ムル書面ヲ發送セリ。」

なお、學業の短縮又は停止についても次の如く記す。

「高等女学部ハ七月中旬ヨリ臨時短縮授業ヲ実施シ八時ヨリ十三時三十分マデトセシガ、九月十一日(月)ヨリ正規ニ復シタリ。尚ホ残留ノ第一学年及第二学年ハ夏期中交互ニ十日間ノ休養ヲ与ヘラレタリ。

專門学校ハ前述ノ如ク八月中全員學業ヲ停止シテ作業ニ従事セシガ、高学年通年勤勞動員ニ服スベキニ付キ現在ノ第二学年生(音楽部三年生ヲ含ム)ハ全部九月十六日ヨリ通年勤務ニ就クコトナルベシ。此ノ間ニ於ケル授業時数ニ就キテハ目下考究中。」

十一月一日には学校工場は正式に海軍衣糧廠の直轄に入り、翌明治節奉賀式当日、式後、高女部では学校工場開設宣言式が行なわれ、四日に高女部第二学年(半数)が学校工場(指月電気工場作業所)に動員され、入所式が施行(八時二〇分於講堂)された。^⑮

十一月末、日本軍は台湾沖航空戦、比島沖海戦に大敗し、防空警戒警報(時に空襲警報)は連日の如く発令され、緊迫度は一段と高まった。

十二月、県教學課指令により高女部第一学年生は七日より十日まで四日間を臨時休業している。^⑯

二十年に入ると戦局はいよいよ悪化し、三月十八日、閣議は「決戦教育措置要綱」を決定、二十四日付で文部次官通牒を發した。これによって国民学校初等科以外のすべての学校の授業を二十年四月から二十一年三月まで停止して学徒に国民防衛の一翼をになわせ、生産に専念させることにしたが、更に五月には「戦時教育令」を公布、学徒の国家への忠節と教職員の率先垂範とを諭し、また、学徒隊を組織して戦時に緊要の任務に挺身させることを規定した。^⑦ 皇中院長は六月四日、文部省主催の近畿地区戦時教育令実施協議会に専門学校長として京都府庁に出張している。五月十七日付の県通達文書「学徒軍事教育特別措置要綱に関する件」の指示により、高女部でも遂に六月二十二日に学徒隊、続いて同二十五日には職場学徒隊が結成され、二十六日付で県に報告された。(資料四)

この頃の動員は、三月十二日(同十日には専門部の第二次卒業式が挙行さる)から第三学校工場(旋盤)の作業が開始され、専門部経済科及び英語科第一学年生が就業した。

同十五日、高女部では午前中入学考査が実施されたが、同時に第二学年生が学校工場(指月電気)に出勤、就業している。^⑧ 五月一日、見習生として出勤していた専門部家政科、保健科の第二学年生も帰校して第三学校工場(旋盤)に就業、高女部では、高女部学校工場を「神武緊志館^{ジンムキンシカン}」と命名した。

また、同月十四日より専門部では第三工場の夜勤も開始された。^⑨

六月十五日、八月六日の空襲により、学院も被災したが、やがて十五日、終戦を迎えるに至る。^⑩ 前記、学徒隊は、終戦直前、学徒義勇戦闘隊への転移が計画されたが、その企図は遂に成らなかった。(資料五)

なお、資料六は別紙を欠くため、その事情は判然としないが、官憲による動員学徒の思想調査が行なわれた形跡を窺わせるものである。

註

- ① 『神戸女学院八十年史』一八三ページ、『神戸女学院百年史 総説』二五九ページ。
- ② 神戸女学院週報第九四二号及び同九四三号。
- ③ 同前、第九七〇号及び九七二号。
- ④ 同前、第九七四号及び九七七号。
- ⑤ 同前、第九八二号。
- ⑥ 同前、第九八四号。
- ⑦ 同前、第九八五号。
- ⑧ 〇〇工場とは宝塚工場である。
- ⑨ 神戸女学院週報第九八五号予定欄に「四月十四日、県下中等学校勤労動員出動壮行会十四時ヨリ神戸市東遊園地ニアリ。動員ヲ受ケル高女部生参加ス」とある。
- ⑩ 同前、第九八七号。
- ⑪ 同前、第九九三号。
- ⑫ 同前、第九九五号。
- ⑬ 同前。
- ⑭ 校内作業場に於て単長白衣の製作に従事。作業時間八時〜十六時。
- ⑮ 神戸女学院週報第一〇〇九号及び一〇一〇号。
- ⑯ 同前、第一〇一四号。
- ⑰ 『神戸女学院百年史 総説』二六五ページ。
- ⑱ 神戸女学院週報第一〇三四号。
- ⑲ 同前、第一〇二五号。
- ⑳ 同前、第一〇三〇号及び一〇三一号。
- ㉑ 神戸女学院週報は第一〇三四号(昭和二十年六月一日付)より同二十二年五月まで中断している。